

巻ノ五 織田家、お家騒動

信奈とその弟・信勝の対立を防ぐために、犬千代は清洲から逐電してしまった。だが、それでも織田家のお家騒動を食い止めることはできなかった。

信勝の家老を務める勝家は、信奈の側近である長秀・犬千代と裏でこまめに連絡を取り合って、信勝派と信奈派との激突をかるうじて回避してきたのだ。

その三人のうちの犬千代が欠けたことで、一気に流れが変わった。信奈陣営は先の今川家との合戦で旗本衆・小姓衆を大勢失った上に、犬千代が抜けたことで明らかに弱体化したわけで、争いはますます加速した。

信勝を担ぐ一派は「今こそあのうつけ姫を廃して信勝さまを尾張の当主に」と盛り上がった。なにしろ信勝方には、姉弟の実母である土田御前もいるのだ。

いつしか信勝のもとには、信奈が動員できる数の二倍を優に超える兵力が集まっていた。

その日、信奈は犬千代の代わりに良晴を連れて清洲城の茶室にいた。文化の中心である京や堺では、茶の湯が大流行していた。

流行に敏感な信奈は清洲城に自分専用の茶室を造らせて茶器を集めはじめているのだが、礼儀作法など守るつもりはなく、この日も座布団の上にあぐらをかいていた。

正座すると、足が痺れるからだった。

信奈は茶の点て方も適当というか自己流で、茶碗の中に大量の抹茶をどばっとプチ込んでは、沸騰したお湯をざばつとかけて「ぐしゃぐしゃぐしゃつ」とかき回して、まだ熱いうちにぐいっと一気飲み。

あげくの果てに、おなかですいたわねとつぶやきながら那古野名物「てばさき」をがぶがぶとかじりはじめた。

てばさきとは言っても、良晴が知っている「世界のてばちゃん」で売られている小さなサイズではない。なぜか、フライドチキンよりも大きかった。てばさきをこよなく愛する信奈がにわとりを品種改良させて大型化させたのだという。

このてばさきの大きさから計算すると、本体はもしかして人間が乗れるサイズだったりして……と想像すると良晴はちよつと怖かった。

「ふう〜。てばさきはいつ食してもまったりと美味しいわね」

ぱくぱくとジャンボサイズのてばさきを小さな唇で丸かじりしている姿は、やんごとなき姫大名にはとても見えない。

同じ礼儀作法知らずでも、まだ「サル」と呼ばれている良晴のほうがお茶の真似事をし

ようとがんばっているだけマシだった。

斎藤道三を相手に茶を飲んだ時の作法はきっちりしていたのに、あれはやはり「よそ行き」だったんだな、と良晴はため息をついた。

「お前って、ほんつとに自由奔放だな。茶の湯の作法を無視するんなら、最初から茶室なんか作るなよ」

「うるさいわね。お茶って飲み物なのよ。飲み物なんてものは、美味しく飲めればそれでいいじゃないの。茶碗をぐるぐる回して『はあ〜いい仕事してますなあ〜』なんてつぶやくのは枯れたお年寄りのやること、わたしの趣味じゃないわ。たらたらやってるうちに、かんじんのお茶が冷めちゃうじゃない」

「それに……そんな丈の短い着物を着てあぐらなんかかいてると、み、見えるぞ」

「問題ないわ。この茶室にはわたしと飼いやるしかいないでしょ。人間の殿方なんてどこにもいないじゃない」

「そう言うのなら、いくらでも見せてもらうけどな……ぎやふつ？」

首を曲げて信奈の太股の間を覗こうとした良晴は、熱いお湯が入っている茶碗を頭上にぶん投げられて悶絶した。

「あちちちちっ？」

「その茶碗、高いのよ。割ったら弁償」

「……なあ、信奈？ 犬千代はどこでどうしているのかなあ、今頃」
 「勘十郎の徒党が、犬千代を捜し回っている。清洲の城下町にはいられないわ。山中をさまよっているわね、きつと」

「飢えたりしないのかな。あいつ、瘦せてるし薄着だから山で過ごすには寒そうだし。心配だ」

むすつと頬を膨らませながら、信奈は窓の外に視線を逸らした。

信奈にとつて犬千代は、幼い頃からずっと犬のように付き従ってきた、唯一心を許せる友にして家来。いや、実の妹同然の存在だったのだ。

「勘十郎から再三、通告が来ているわ。犬千代を引き渡さないで、ご謀反申し上げる、と……。やるなら勝手になさい、戦場でわたしの首を盗ればいいでしょ、と突つぱねているけれどもね」

「信勝本人はただのお調子者なだけけど、取り巻き連中がなあ。勝家が抑止力になつてくれないだろうか？」

「六は代々織田家に仕えてきた武門の家柄。剛勇無双だけれど、竹を割ったような性格だから、まつりごとや陰謀にはからつきしなの。そこが好きなだけどもね」

「たぶん、勝家が信奈の家老で、長秀さんが信勝の家老だったらきつとうまく治まったんだらうけどな」

「今更言つても仕方がないことよ。勘十郎の周りにいる連中はみんな名門だけれどもヒョッコみたくないやつらで、戦になるとなにもできないの。勝家抜きでわたしを倒せるわけがないことくらいは理解しているだろうから、謀反となれば勝家が兵を率いてわたしと戦うことになるわね。最悪だわ」

「身の程を知らないだけに逆に厄介だな」

「あんたほどじゃないけど。この尾張国主の織田信奈にタメ口を利くバカ家臣は、尾張広しといえどもあんただけだわ」

ともあれ、今謀反されたら最悪だわ、と信奈は「てばさき」をかじりながらつぶやいた。「駿河の今川義元が上洛の準備を進めているのよ。義元が動けばまっさきに攻めこまれるこの尾張で、姉弟が探めている余裕はもうどこにもない。ああもう。あの謀反好きのバカ弟の相手をするのもうこりごりよ！ 誰のせいで犬千代が出奔したのよ、あいつが先に犬千代にちよつかいを出したんでしょ？」

「しかし、信勝はお前にとつて、血を分けたただ一人の弟だろう？ いくら戦国の世だからつて実の弟を殺すなんて絶対にダメだぜ」

「……そうね……そこまであなたが言うなら、もう一度だけあいつを許してあげてもいいかもね……殺すのは一瞬でできることだし……ただし、許せるのはあと一度だけよ」

「えっ？ ほんとにっ？」

「……はあ？　なんであんたが驚く（おどろ）のよ？　あんたが泣きそうな顔でしつこく説得してく
るから、しぶしぶ考え直してやったんでしょ？」

信奈が俺の言葉を聞いてくれた！　信勝を殺すという覚悟（かくご）を翻（ひるがえ）してくれた！　良晴はう
っかり小躍り（こわど）したくなり、（いや俺は別にこいつの行き先を心配しているわけじゃなくて、
その、戦国（こ）の世に魔王（まおう）が降臨（こうりん）したら日ノ本中の民が迷惑（めいわく）するから敢（あ）えて信奈を心配してや
っているだけで、げふんげふん）と強（ま）がりをつぶやいていた。

「とにかく、よかつた！　だが、どうすれば姉弟（あな）が仲直りできるんだろうな。道三の時み
たく、直接会って飯でも食ってみればどうだ？」

「さあ。あいつに天下を語っても仕方ないと思うけれど」

「なにしろ、いろいろ大臣だからな。あいつ、なんであんなにいろいろなにこだわるんだろ
う」

「……それは、たぶん……」

と、そこに。

いつの間にか音もなく清洲城内（せいしゅうじやう）に潜入（せんいん）していた信勝方の忍びから、矢文（やぶみ）が畳（たたみ）の上に投げ
込まれていた。信奈はその文（かみ）を読むなり、顔を真っ赤にして破り捨てていた。

「デ……アルカ。良晴、これは勘十郎（かんじゅうら）からの宣戦布告（せんせんぷく）状（じょう）だわ！　犬千代（いぬちよ）を引き渡さなかつ
たことを口実にして、とうとう勘十郎（かんじゅうら）のやつ、末森城（すえもりじやう）で拳兵（けんべい）した！　大将（たいしやう）は六！　軍勢（ぐんせい）は

総勢、千七百！　一方、わたしが集められる兵の数は七百が限度（げんご）だわ！」

「戦力差は倍以上（じやうばいじやう）じゃないか！　しかも勝家が軍を指揮（しき）するなんて。織田家存亡（おだけぞんぼう）の秋（あき）、だ
な……」

信奈の白い頬（ほ）が、ひどく張り詰（つ）めていた。

「ああもう、苦（くる）いお茶（ちや）ねっ！　売（う）られたケンカよ、買ってやろうじゃない！　兵（へい）を挙げ（あ）げ
主に公然（こうぜん）と謀反（ぼうはん）するだなんて、いくら弟（あに）とはいえ許（ゆる）されることじゃないわ！」

今（いま）にもかんしゃく（かんしゃく）を起（おこ）しそうな苛（いら）立つ（た）つた声（こゑ）で、茶碗（ちawan）の中の濃（こ）いお茶（ちや）をぐいっとまた一
気（いき）飲み（のみ）した。

「ほんとうに信勝（しんしょう）と戦（いく）うのか？　あいつはバカ（ばか）だけど、そう悪いやつじゃない。外見（がいけん）だけ
はお前（まへ）似（に）の貴公子（きこうし）だしな」

「……わたしのよな姫大名（ひめなま）はね」

「うん？」

「討（う）ち死（し）にしちゃえば別（わか）れだけれどね。たとえ戦（いく）に敗（ま）れて捕（とら）えられても、髪（かみ）を下（くだ）ろして出家（しゅつが）
すれば命（いのち）だけは許（ゆる）されるわけ。そういう習（な）わしなの。『姫武将不殺（ひめむしやうふしかつ）』の掟（おきて）でもいうの
かしら？　でも男（おとこ）は別（わか）れ。降伏（こうふく）しても、敵方（てきほう）に許（ゆる）されなければ問答（もんた）無用（むよう）で切腹（せきぷく）、あるいは斬首（ざんしゅ）
よ。勘十郎（かんじゅうら）は人材（じんがい）豊富な今川方（いまがわ）にしてみればわざわざ家臣団（かしんだん）に組み入れたくなるほどの武
将（しやう）じゃないし、謀反（ぼうはん）常習（じやうじゆく）者（もの）だしね」

不機嫌を装いながらそうつぶやく信奈の声が、珍しく弱々しかった。

「だからどのみち、あの程度の器じゃ尾張の主になっても戦国の世を生きられないわ。わたしが国を譲っても同じ結果になるの。ううん、この尾張の国が減じるのだからもつと悪いわね」

良晴は、そんな信奈の横顔をじつと見つめていた。

「そうだ信奈。斎藤道三に援軍を頼もう。道三に姉弟ゲンカを仲裁してもらおうんだ。爺さんは今もう、お前の父親のようなものだ」

「蝮だつて美濃国内の造反勢力を抑えるのに手一杯よ、無理ね。それに、ぐずぐずしていたら今川義元がなだれこんでくる。末森城へ出撃するわよ」

「信奈！」

「万千代、いる？ 馬、ひけーい！」

末森城で信勝が謀反に踏み切った経緯は、このようなものだった。

「勝家、ほかあ姉上に謀反して尾張当主の座を實力でつかむことにした！ とはいえ、ほかは合戦が苦手な貴公子でね。合戦の指揮は勝家、きみに一任しよう！ ほかは末森城でーんと構えて、勝ち戦の知らせを待っているからね！ はつはつは、よろしく頼むよー」お調子者の信勝は周囲の面々にすっかり乗せられてしまい、打倒信奈の兵をあげると決

断したのだった。

しかも、勝家に謀反軍の采配を丸投げするというさつそくの無能貴公子ぶりだった。

「ええええっ？ いけません信勝さま！ 姫さまにたてつくなんてもつてのほかです。そもそも今の織田家はそんなことをしている場合では」

勝家は武辺に青春を捧げた生粋の姫武将。竹を割ったような豪放磊落な性格で、政治感覚とかそういう小難しいものを持ちあわせていなかった。

立場は信勝の家老ながら、勝家は昔から信奈をある意味崇拜している。

無愛想で毒舌で少々意味不明の言動と奇矯な行動が目立つが、父・信秀が病で亡くなる以前の信奈は、思わず見ている勝家のほうが「はあ……」と溜め息をついてしまうような美しい笑顔を見せることも希にはあったのだ。

信奈はただ容姿が美しいというだけでなく、思わず頬をすりすりしたくなるほど愛らしい表情だつて持っているのだ。

だがしかし、最大にして織田家中唯一の理解者だった父親を失ってからの信奈は、その父の葬儀場で騒動を起こし、以後はかたくなに心を閉ざして唇を固く結び、家臣たちに対していらいらと尖り続けていた。信奈の守り役・平手のじいが死んだあと、信奈が信頼している家臣は、長秀と犬千代くらいだ。勝家はこれまで、この二人と協調して織田家の内紛を防いできた。ところがその犬千代が欠けた。残された長秀は温厚な性格で、武闘派で

はない——。

だからこそ、信勝の取り巻きたちが「愛想のよさだけには定評のあるうちの殿のほうがいけるんじゃないかね」と増長して謀反をもくろむようになってしまったといえる。

「やめてください！ 姫さまは信勝さまの姉上ですよ！」

勝家は信勝を止めたが、逆に信勝の取り巻きたちから、

「勝家どの。尾張一の槍の腕前は、嘘だったのか」

「そこもとは信奈方に通じているのではないか」

「前田大千代と陰で何度も会っていたという噂があるが」

と矢継ぎ早に責められた。

ああつちくしよう、こいつら全員叩ききってしまいたい！ 虎の威を借る狐どもめ、織田家に巣くう獅子身中の虫どもめ！ と勝家は取り巻き連中に向けて殺気を放ったが、どこか抜けている信勝はどこ吹く風でいっこうにひるまなかつた。

「まあまあ、諸君。そう勝家を責めるな。いいかい勝家。ぼく自身が姉上と戦場で戦うのは気が引けるし、それに尾張最強のきみが思う存分暴れれば、さしもの姉上もおとなしく降参するだろう！ 姉上はたいして合戦が得意じゃないからね。ぼくほどじゃないけどね。むろん、この戦いが長引くと今川家や斎藤家がどう動くかわからないから、一日でけりをつけてくれたまえ！」

勝家は、数の論理に押されてついに信勝の謀反を止めきれなかった。

あたしの責任だ、と勝家は自分を責めた。

もはやかくなる上は、速戦で決着をつけねばならない。この尾張国内でのお家騒動が長引けば、上洛を窺っている今川家に隙を突かれる。

織田勘十郎信勝、末森城にて挙兵！

信勝軍の大將は、尾張最強を誇る姫武將・柴田勝家！

ついにこの宿命の対決の時が来てしまった、と尾張全土が震撼した。

この日、尾張最強の猛將・柴田勝家——あだ名は「六」は、信勝への忠義と信奈への思慕との間を揺れながら、やむをえず清洲城と末森城との間に位置する稻生の平原に陣取り、川を越えて進撃してくる信奈軍を待ち受けた。

「あたしが率いる軍勢は千七百。先の今川との合戦で打撃を受けている姫さまはせいぜい七百。全力で戦えば、あたしが勝ってしまう。かといって手を抜いて対陣を長引かせたり、膠着して両軍が互いにぼろぼろになれば、すぐさま東から今川軍が攻めてくる。織田家を滅ぼさないためには、速戦で決着をつけるしかない。どうする、柴田勝家」

一方、戦場に到着した信奈のもとには、さらなる衝撃的な報告が入っていた——。尾張と三河の国境に位置する、対今川家の最終防衛拠点、鳴海城。

この鳴海城の城主が、信奈と信勝の家督争いを見て織田家を見限り、今川義元に寝返つたという。

その上、鳴海城の南西に位置する織田方のもうひとつの拠点・大高城をもすばやく落城させたのだと。

「デアルカ……鳴海城と大高城の周囲に砦を——付城を設けて、両城の動きを封じるのよ。今川方からの補給路を断たないと……勘十郎！ よくもこんな時に最悪の真似をしてくれたわね！ あんたはほんものの馬鹿だわ！」

信奈の軍師として侍る丹羽長秀が「鳴海城と大高城を落とされた今、もはや尾張は今川に対して丸裸も同然となりました。そして目の前には柴田勝家どのの大軍勢。内憂外患。姫、現状は一点です」と苦しげにつぶやき、小姓たちに交じって「草履取り」として従軍していた良晴は「ちくしょう！ 俺に勝家みたいな武力があつたら！」と歯ざしりした。

「サル。あんたの織田家における役目は米の買い占めと草履温めでしょう？ まともに馬にも乗れないくせに、戦場で六の前に飛びだしちやダメよ。ひとたび槍を取った六は文字通りの鬼よ？ 一瞬で首が飛んじやうから」

「だがな。いくら米転がして巨利を生んでも、こんな切羽詰まった戦場で兵士として働けないんじゃないあ俺は……せめて犬千代の代わりにお前の護衛役を務められればいいのに。われながら情けねえ」

良晴も、浅野の爺さんのもとの日夜槍の修行に明け暮れてはきたが、槍の穂先を避ける技術ばかりが高まる一方で、猛将・柴田勝家と戦うなんて夢のまた夢だ。勝家がお年頃の女の子姿なのはさすがに慣れて、「男なのに女より弱い」ということは気にならなくなってきたが、良晴の武力はまだまだ戦場で兵士として戦える域に達していない。そもそも、いくら戦場とはいえ人間を槍で突き殺すような真似は、良晴にはできそうになかった。

「相良どの。あなたは平和な未来から来たのですから、この時代の武将より弱くて当然です。ご自分にできることを精一杯なさればよいのです」

「だけど長秀さん」

「なんでもお一人でこなせる人間など、おりませんよ。姫の家臣として一人前になりたいのであれば、ともかく己の得意技を磨くことです。たとえば私の場合は、採点の精度をもっとあげることです」

「それって得意技だったのか……それよりも圧倒的な勝家軍を破る知謀を見せてくれよ、長秀さん」

「私は薙刀の名手で、古今東西の知識に長けた物知りお姉さんですが、実戦の指揮は苦手なのです。私の武名がもつと高ければ柴田どのもこのような苦しい板挟みのお立場には……私は軍師としては二十点ですね」

つまり事実上の軍師不在か……その上、兵数も不足。犬千代が抜けているから猛将もい

ない。ないないづくしだ、これはまずいと良晴は焦りはじめていた。

しかし倍以上の兵力を誇る勝家の軍勢を前に、信奈は一步もひるまなかった。

「もう合戦ははじまっているのよ！ 黙っていなさいサル！ 行くわよ！ 全軍、突撃！ 六の旗印『雀ちゅんちゅん』を目標してかかれえっ！」

「姫。柴田どのの家紋は雀ちゅんちゅんではありません。雁です。同じ鳥類ですが五十点です」

「ええ？ 雀でしょ？ どのみち六はかわいいどうぶつが大好きだから似たようなものよ。その上、かわいいかわいい、ごめんなさいごめんなさいと泣きながら雀を焼いて美味しく食べちゃうんだから業が深いわよね！」

なるほど。勝家も信奈も胸が大きい……特に勝家は。そうか。犬千代に足りなかったものは鶏肉だったのか、と良晴は気づいた。この戦場に、犬千代がいてくれれば。

「ちなみに丹羽家の家紋は『バッテン』です相良どの。あなたの戦ぶりは点数が低くて不合格です、という敵への厳しいダメ出しを表しています。私の採点能力を見せつけることで敵を威圧するという寸法です」

「それはその、敵を挑発しているだけのような？ 滑ってるよ長秀さん」

「滑ってはいません決して滑ってはいませんとも相良どの」

ここに稲生の合戦が、はじまった。

信奈も勝家も、この戦いを長引かせてはならないことを知っている。

いずれが勝つにしても、短時間のうちに圧勝しなければならぬ。長引けばそれだけ死傷者が増え、この内戦の隙をついて鳴海城と大高城を奪い取った今川軍をますます利するばかりだった。

だから勝家軍と信奈軍は、容赦なく正面から激突した。

信奈はしゃにむに、わずかな手勢を突撃させた。

自らも種子島を馬上で構えて、「一人で撃てば反動で吹き飛んじゃうわ。サル！ 支えなさい！」と良晴を馬上に引き上げ、自分の腰をつかませ、敵兵の群れめがけて弾を放った。

信奈の腰の細さ、その身体の熱さに良晴は思わず遠慮しようとしたが、これは合戦だ。互いの命がかかっている。敵味方の兵の命もかかっている。尾張の命運もかかっている。照れている暇はなかった。それでも信奈を後ろから支え、いざとなれば盾になることくらいはできる。俺は信奈に背中を任せられるほどに信頼されている、と良晴は気づいた。

「ちっ。当たらないわね！ 悔しいけれど馬上からの射撃は無理ね！ 弓隊、放てえ！」
敵はその圧倒的な数を頼みに、軍を二手に割って挟撃してくる。

いったん戦場に立った勝家の采配は、容赦がなかった。

「まずいわ。左翼から末森の別働隊！ 挟まれたら壊乱するわ！」

「戦局は十五点です。正面の柴田どのは姫にお任せします。別働隊は私が防ぎます！」
 「頼むわね、万千代！」

「柴田どのと直接槍を交え、この合戦をやめるよう説得したかったところですが……どう
 か姫、ご武運を！ 相良どの、姫をよろしく願います！」

「わかった！ 長秀さんも、死なないでくれよ！」

「この局面で年上の姫武將にその甘い言葉。相良どのはどうやら天然ですね。九十点です」
 言葉ではおどけながらも、決死の形相を浮かべた長秀が一隊を率いて、左翼戦線へと離
 脱していく。

信奈率いる本隊の数はさらに減った――

気づけば、本陣で信奈を守る兵の数は、わずか四十人ほどになってしまっていた。

柴田勝家は、この時を待っていた。

「勝機！」と叫びながら、敵陣の中から勝家が巨馬を駆って出現し、一直線に信奈をめが
 けて突進してきた。

すさまじい突進力だった。触れるものをみな、問答無用で薙ぎ飛ばしていく。

慌てて信奈子飼いの精鋭種子島部隊がいつせいに弾を放つたが、すでに種子島部隊が想
 定していた防衛ラインは勝家の問答無用の一騎駆けによって突破されていた。放たれた弾
 はすべて、勝家を通り過ぎたはるか後方を飛んでいた。

「とんでもねえ！ こんなに強かったのか勝家は？」

良晴は、「種子島が通じない」とつぶやき硬直して馬上で固まっている信奈の腰を背後
 から力一杯抱いていた。

「来たぞ！ どうする信奈？」

「種子島部隊の運用方法がまだまだ甘かった。一流を相手にした実戦では、装填に時間か
 かる種子島は通じないということね……」

なぜサルが姫さまと馬上で抱き合っているんだあ！ と真っ赤になりながら、勝家は必
 殺の間合いに信奈を捉えようとしていた。

「姫さま！ 申し訳ありません！ 尾張の危機です、あたしは主君・信勝さまのために鬼
 になります！ 降参してください、さもなくては……！」

勝家はついに信勝一派の暴走を止められなかった罪を背負い、「主殺し」の汚名を被つ
 て自らも切腹する覚悟だった。